



バッハの森通信

第 155 号
2022 年
4 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

生きる意味

自由と独立を求めて

2月24日にプーチン大統領の命令の下に、ロシア軍がウクライナに侵攻して以来、世界中がウクライナ問題で揺れています。無残に破壊された家々や町の有様、避難する幼い子連れの婦人たちだけではなく、ロシア軍が撤退した後に残された民間人の遺体という、眼を背けたくなる映像が連日報道されます。

これらの強烈なニュースから、誰もがいろいろなことを考えさせられていると思います。1945年に中学2年生だった私には、戦争末期の思い出が重なり、戦争がどれほど悲惨な事か、すっかり忘れていたことを、改めて思い出しました。民間人を無差別に殺戮しているロシア軍が非難されていますが、当時は東京の下町を初め日本中の民間人の居住地をアメリカ軍が空爆していました。広島、長崎の原爆投下は言うまでもありません。

* * *

戦争体験とは別に、大変感銘を受けたことがあります。それは、「自由と独立」を守るために戦っているとウクライナの人々が異口同音に語ったことです。ロシア軍が侵攻を始めたとき、世界中の人たちは、数日中に首都キーウが陥落し、傀儡政権が樹立されて戦争は終わると考えていたようです。しかしキーウは死守され、1ヶ月後にロシア軍はキーウの包囲を解いて撤退しなければなりませんでした。

しかし、頑強に抵抗したウクライナの人々は、大きな犠牲を払いました。しかも今度は東部・南部の攻撃に矛先を変えたロシア軍が、故意に民間人の居住区を狙ってミサイルを打ち込むため、更に多数の犠牲者が出ています。このような惨状を見かねて、これ以上、

民間人の命を失わないようにするために、ウクライナの人たちは武力抵抗を止めるべきではないかと、ある情報番組で日本人の解説者がコメントしていました。これを聞いて私はエジプトで奴隷だった人々が、モーセに率いられてエジプトを逃げ出したときの物語を思い出しました。

いざエジプトを脱出して荒れ野に出てみると、食べ物が何もないことが分かり、人々はモーセに向かって不平を言いました。「エジプトで死んでいればよかった。あのときは肉の鍋の前に座って腹一杯パンを食べていたのに、あなたは私たちを荒れ野に連れ出して飢え死にさせようとしている」。このときは神が天からマナを降らせたので、人々は不平を言うのを止めました。ところが、彼らが海辺まで来たとき、エジプト軍が追いかけて来るのを見て、進退窮まった人々はモーセに向かって叫びました。「荒れ野で死なせるために私たちを連れ出したのか。荒れ野で死ぬより、エジプト人に仕えていたほうがましだ」。このときも神が奇跡を起こして海の水を二つに分け、人々は海の中の乾いた所を渡れたので、エジプト軍の追跡から逃げることができました。彼らが荒れ野を旅した40年間、このような事件が繰り返されると聖書は伝えます。

* * *

聖書の物語は、いざというとき助けてくれる神を信じなさいという教えですが、奇蹟を信じるという非日常的な次元の話は別として、荒れ野で飢えたとき、奴隷のまま腹一杯食べていられた方がよかったという人々の思いを簡単に否定できますか。自由と独立か、奴隷に留まるかの二者択一を迫られたら、あなたはどちらですか。どちらの選択も可能ですし、どちらかが正しいとは誰も言えないと思います。ただウクライナの人々は、犠牲を払っても自由と独立を選びました。それが彼らの「生きる」意味だったからです。

(石田友雄)

死神の過ぎ越しを待つ

命の勝利を信じて

*このメディタツィオは、2022年3月20日に開かれた「創立記念コンサート」で朗読された原稿を少々修正した文章です。

クリスマスと復活祭

教会の暦は、クリスマスと復活祭という二つの祝祭日を起点として構成されています。誰でも知っているとおおり、クリスマスは12月25日に決まっていますが、復活祭は春分の後の満月の次の日曜日、という太陽と月の動きによって決まるため、毎年その日が移動します。今年の春分は3月21日、その後の満月は4月16日-17日なので、4月17日（日）が復活祭となります。何でこのような複雑な定め方になっているのかというと、クリスマスがローマ時代にキリスト教徒の神学的主張によって定められた新しい祝日であるのに対して、復活祭は歴史的な出来事を記念して古来伝えられてきた祝日に基づいて定められたからです。

すなわち、クリスマスは元々ローマ帝国の冬至祭として、勢いを失った太陽に代わって元気な新しい太陽が現れることを祈願するお祭りでしたが、イエス・キリストこそ新しい太陽であると信仰するキリスト教徒によってイエス・キリストの降誕祭にされたのです。

「復活祭」は不完全な創作語

他方「復活祭」は、多分、英語の「イースター」「Easter」乃至はドイツ語の「オステルン」「Ostern」を参考に、十字架上で絶命したイエス・キリストが葬られてから3日後に復活したという新約聖書の記述に従って創作された訳語でしょう。ところが調べてみると、「復活」という言葉を用いて「復活祭」を表す言語は、日本語以外見つかりません。英語の「イースター」とドイツ語の「オステルン」については、古代ゲルマンの春の女神「オスタラ」(Ostara)に由来すると、しばしば説明されます。冬枯れの野原が春になると一斉に緑になり生き返ったように見える自然の姿を、死から復活したイエス・キリストと重ね合わせたのでしょう。世界中で農民が古来祝ってきた「春祭り」です。しかしこの通説を「イースター」の語源と認める研究者はいません。結局、今のところ原意不明のまま、「イースター」

」は「パスカの誤訳だ」と断定する聖書辞典もあります。

過越祭（パスカ）

「パスカ」とは、ヘブライ語の「ペサハ」のギリシヤ語読み、或いはラテン語読みで、「過越祭」或いは「過越の犠牲」の意味です。そして英語とドイツ語以外のヨーロッパ各国の言語では、すべて「パスカ」に由来する単語で「過越祭」も「復活祭」も同時に表します。例えば、フランス語の“Pâque”、イタリア語の“Pasqua”、スペイン語の“Pascua”、オランダ語の“Pasen”等々です。この状況は、イエス・キリストの復活を「復活」の一言で記念することはできないと、古代キリスト教徒が考えていたことを示しています。「パスカ」は本来「過越祭」或いは「過越の犠牲」という意味ですから、「パスカ」によってイエス・キリストの復活をクライマックスとする「過越祭」を意味していたと言うべきでしょう。

実際、『佛和辞典』で“Pâque”をひいてみると、「1.(ユダヤ人の) 過越祭、2.(キリスト教の) 復活祭」という訳語がつけられています。しかし、1. はいいとして、2. は「(キリスト教の) 復活祭と過越祭」とすべきでしょう。

聖書が語るところによると、紀元前13世紀頃、モーセに顕現した神ヤハウエが、エジプトで奴隷にされて苦しんでいるイスラエル民族の先祖を救い出せと命じます。そこでモーセはエジプトの王ファラオと交渉して、彼らがエジプトから出る許可を願いますが、当然、ファラオは聞いてくれません。すると神は次々と災害を下してエジプト人を苦しめますが、それでもファラオが出国を許可しないのを見て、モーセに告げます。(太陽暦の3月/4月に当たる)ニサン月14日の晩、家族ごとに用意した1歳の雄の小羊を屠り、その肉を焼いて食べ、その血を取って家の入り口の柱と鴨居に塗れ。その夜、私ヤハウエはエジプト中を廻って人から家畜に至るまで、全ての長男を打つ。しかし血のしるしがあるお前たちのところは「過ぎ越す」。その夜、エジプト中で全ての長男が死んだため、ファラオはモーセに言いました。民を連れてエジプトから出て行ってくれ。

この後、モーセに率いられてシナイ山に行った人々は、そこでヤハウエと契約を結んでイスラエル民族になったと聖書は伝えます。このように「パスカ」(「過越」)は、奴隷から救い出された先祖が、神に選ばれてイスラエル/ユダヤ民族になったことを祝う祭日なのです。それ以来、今日まで、ユダヤ人の家族は毎

年「過越祭」を祝いその晩餐会で、「過越物語」を朗読します。そこに「もし神様が私たちの先祖をエジプトから導き出さなかったなら、私たちは今なおエジプト人の奴隷にされていただろう」という言葉があります。自分たちが神の恵みにより、自由な民族として独立していることの確認です。

過越の犠牲、イエス・キリスト

イエスの弟子たち、すなわち最初のキリスト教徒は、過越の出来事を象徴的に理解して、十字架上で血を流して亡くなったイエス・キリストは、過越の小羊のように自ら犠牲となって人間を死の奴隷から救い出して命を与えたと解釈しました。小羊の血が死神を退けたように、イエス・キリストは復活して、命が死に勝利したことを示したと信じたのです。なお、古代イスラエル人は、血は命であると考えていました。

確かにイエス・キリストの受難と復活は、最初のキリスト教徒の信仰の出発点でした。そこで4世紀初めまでに確定された教会歴は、イエスが十字架につけられた金曜日を含む1週間を「聖なる7日間」(Hebdomada Sancta)、「受難週」と定め、特に「最後の晩餐」と一般に呼ばれる「過越の晩餐」が執り行われた木曜日の夜からイエスが復活した日曜日までを「過越の三日間」(Sacrum Triduum Paschale)と呼んで、一年で最も厳粛な日々として守るようになりました。要するに、古代キリスト教徒は、イエスの復活、すなわち、命の勝利を信じ、緊張感をもって死神の過ぎ越しに耐える一連の出来事を「過越」(パスカ)として理解したのです。

復活祭の小羊 (Osterlamb)

ここでマルティン・ルターの独自の神学についてお話ししておきます。すでに申し上げたとおり、ドイツ語で「復活祭」は「オステルン」“Ostern”と言います。そして「過越祭」乃至は「過越の犠牲」は「パスカ」をドイツ語読みして「パサー」(“Passah”又は“Passa”)と言います。ルターの神学的主張によると、イエス・キリストは受難・復活の前から、いや、そもそも「神の小羊」(Agnus Dei)として生まれた方なのだから、彼の誕生によって「過越」は「オステルン」に変わったと言うのです。そこで、例えば、イエスが十字架につけられる前の晩、弟子たちがイエスに「どこに〔過越の小羊〕(Passalamm)を食べる席、すなわち、いわゆる最後の晩餐の席を用意しましょうか」と訊ねる文章が、ルター訳の福音書では「どこに〔復活祭の小羊〕(Osterlamb)を食べる席を用意しましょうか」となっています。同様に、パウロがコリントの

信徒へ宛てた手紙で「私たちの〔過越の小羊〕(Passalamm)が屠られた」と言うところを、ルター訳聖書は「私たちの〔復活祭の小羊〕(Osterlamb)が屠られた」と訳します。ルターが作詞したコラール「キリストは死の縄目につき」“Christ lag in Todesbanden”の第5節は、“Hier ist das rechte Osterlamm”「ここに眞(マコト)の復活祭の小羊がいる」と歌い出し、「彼について神が命じたもうた(小羊)が。／彼は十字架の木高く／熱い愛で焼かれた。／その血は私たちの扉に印となり／それを信仰は死に対して突きつける。／絞殺者(死神)は最早私たちに危害を加えることができない。／ハレルヤ」と続けます。ここに描かれている小羊も、明らかに十字架上のイエスであり、その時、イエスはまだ死んでいないし、当然、復活していませんが、ルターにとってそれは大切なことではないのです。大切なのは、「神の小羊」であるイエス・キリストが、自分の血によって私たちから死神を追い払い、死神に勝利して復活なさったということなのです。従って、最初から「復活祭の小羊」(Osterlamm)と呼ぶべき方だと言うわけです。ただし、ルターの後で翻訳されたドイツ語の聖書は、これらの箇所を「過越の小羊」(Passalamm)と訳して時間的混乱を避けます。

イエス・キリストは生まれながらに「復活祭の小羊」(Osterlamm)である、というルターの神学的解釈は、イエスが父なる神の独り子として生まれたという三位一体神学と同じことで、理解できないわけではありませんが、こう言われたのでは「過越」(パスカ)のダイナミックな歴史的記憶が消えてしまいます。やはり、小羊の血を入り口に塗り、命の力を信じて、死神が「過ぎ越す」まで忍耐強く待った後、遂に「自分たちが生きている」ことを実感した人々がいたことが、「パスカ」の始まりであることを忘れてはならないのです。

* * *

今、人類は「コロナ・ウィルス」と「プーチン」という死神に苦しめられています。すでに多数の人々が犠牲になり、この死神を追い払う小羊が現れることを世界中が待望しています。しかし、いつどのような形で現れるのか、誰にも分かりません。それでもこれらの死神との戦いから分かってきたことは、全人類が一つの運命共同体であり、お互いに助け合わなければ誰も生き残れないということです。ですから、私たちは、命が死に必ず勝利することを信じて、前向きに歩んでまいりましょう。(石田友雄)

理解して歌う喜び

去る3月20日に「過越の犠牲に称賛を」と題して「創立記念コンサート」が開かれ、私もクワイアのメンバーとして参加させていただきました。今回歌ったJ.S. バッハが作曲したカンタータ「キリストは死の縄目につき」(BWV 4)は、私には思い入れの深い曲です。生まれて初めて歌ったカンタータだからです。

1995年、バッハの森で開かれた「マタイ受難曲」のセミナーに参加したおりに、初対面の故・一子先生に「カンタータを歌ってみたい」とお話ししたところ、何と翌年、クワイア・メンバー以外の人も体験できるワークショップを企画してくださったのです。喜び勇んで申し込みましたが、当時の私は「コラールって何かしら？ 日曜学校で歌った讃美歌とは違うのかしら？」というレベルでした。そして楽譜を見て少々不安になりました。コラール第4節のカンタータ第5曲を開くと、とても細かい音符でドイツ語が眼に突き刺さってきました。思わずバッハの森に「初めからドイツ語で歌うのですか？」と電話したところ、対応してくださった方が「そうですねえ、皆さんお歌いになれると思いますよ」と平然とおっしゃったので、益々心配になりましたが、1月から練習に参加させていただきました。すると、バッハが教会歴に合わせて復活祭第1祝日のためにこのカンタータを作曲したこと、それがコラールの歌詞と旋律によって構成されていることなどを教えていただき、何よりもオルガンと歌えることが嬉しくて土曜日の練習が待ち遠しくなりました。今はあの頃より、少しはドイツ語が読めるようになり、由帆さんのオーケストラのような素晴らしいオルガン演奏に合わせて歌うことができたかしら、と思っています。

コンサートで歌った「いざ来たれ、異邦人の救い主よ」によるミサ曲を作曲したJ.C.F. フィッシャーは、J.S. バッハより少々年上ようですが、ミサ曲にしてはソプラノの音が高く苦勞しています。高いGの音が続く、しかもそのGに私の苦手の「エ」の発音を乗せなくてはなりません。指揮者の恵さんが「ソプラノ特訓！」と、いつもアドヴァイスをしてくださいます。来期はもっと楽に発声ができるようになりたいと思っています。

今回のコンサートのテーマの「過越」という言葉を、子どものとき日曜学校で耳にした記憶がありますが、意味は分かりませんでした。映画「十戒」で煙のようなものがジワジワと家々に忍び寄るシーンがあり、そのようなことをイメージしていました。しかし、バッハの森で歌うようになってからは、エジプトで奴隷だったイスラエル民族の先祖を救い出すために、犠牲の小羊の血を塗ってある家だけ死神になった神ヤハウェが過ぎ超していったこと、その小羊が十字架の上で血を流したイエスを表していると考えた人たちがキ

リスト教を始めたこと、ルターが過越の小羊を復活祭の小羊と翻訳したことなどを学び、段々と謎が解けてきました。ここでは、合唱練習だけではなく、「歴史書・聖書入門」や「コラール・カンタータ入門」などの講座で総合的に学べる喜びを感じています。友雄先生が訳された「主は死の縄目に」の第7節で「古きパン種は、御言葉になし」と歌う度に自分も「古いパン種」を除いて生まれ変わろうという思いが湧いてきます。(三縄啓子)

*このコンサートの音声をYou Tubeにアップしました。「つくばバッハの森」と入れて検索すると見られます。また「チャンネル登録」をすると過去の映像も見ることができます。

* * *

一つに溶け合ったバッハの響き

3月29日、バッハの森記念奏楽堂においてコンサート「オルガンの息と弦の響き」が開催されました。主催：Tsukuba Pipe Organ Project(代表：宮本とも子)、後援：一財バッハの森、支援：公財つくば文化振興財団により、J.S. バッハの原曲を、ヴァイオリン：戸田弥生、チェロ：河野文昭、オルガン：宮本とも子の三人の演奏家がソロと合奏で奏でる試みでした。

曲目は、オルガンソロで幻想曲「ピエ ドルグ」BWV 572他、ヴァイオリンとオルガンで「オブリガート・チェンバロとヴァイオリンのためのソナタ第6番」BWV 1019、チェロとオルガンで「ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロのためのソナタ第2番」BWV 1028、ヴァイオリンとチェロとオルガンで、カンタータ「わがすべての行いに」BWV 97より、テノールソロのためのアリア、それにアンコールとして、「無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第1番」(BWV 1001)よりサラバンド、「無伴奏チェロ組曲第1番」(BWV 1007)よりプレリュードが演奏されました。

皆さん著名な方々ですが、ご紹介すると、ヴァイオリンの戸田弥生先生は、1993年にエリザベート王妃国際音楽コンクール優勝、桐朋学園大学音楽学部非常勤講師、チェロの河野文昭先生は、東京藝術大学教授、オルガンの宮本とも子先生は、フェリス女学院大学名誉教授です。

今回は、演奏に先立って特別に準備しなければならないことがありました。バッハの森記念奏楽堂のオルガンの演奏台は舞台から約2メートル高いため、オルガニストと舞台のソリストたちが相互に見えないという問題を解決しなければならなかったのです。そこで相互にモニターするためのビデオカメラを設置して何度か事前にチェックしたのち、無事にオルガニストと舞台上の弦楽器奏者の間でコンタクトが取れる

ように機器をセットすることができました。この準備と調整のため、私は演奏会前日のリハーサルに立ち会ったので、オルガンとヴァイオリンとチェロの三人が、前日のリハーサルでどのように音楽を作り上げていかれたかをつぶさに見学することができました。

リハーサルは、コンサート前日の午後、チェロの河野先生と宮本先生のオルガンで始まりました。チェロとオルガンの音色が重なることなくお互いに聞き取ることができるよう、オルガンのストップ選定が進められました。宮本先生は何度もストップを選び直し、客席にいるアシスタントを務めてくださったオルガニストの鈴木由帆さんが、どう聴こえるかを宮本先生に伝えました。オルガンの音色に関わるのはストップの選定だけではなく、オルガンの手鍵盤・足鍵盤のいずれが、曲想に合うか？独奏楽器をひき立たせることができるか？を決めなければなりません。問題となる箇所では、手鍵盤・足鍵盤を交互に弾き比べ、客席の鈴木さんに聴こえ方を確認します。当然、チェロの河野先生にも意見を求め、リハーサルの半分近くがストップの選定に費やされました。こうして曲全体のチェックが終わったところで、ようやく通し練習が始まりました。

リハーサルの後半は、ヴァイオリンの戸田先生とオルガンの宮本先生です。やはり、ストップによってはヴァイオリンの音がオルガンの音に埋もれることがあり、ここでも、客席で聴く鈴木由帆さんに聴え方を

確かめながら、曲の各部分についてストップと鍵盤を決定していきます。ヴァイオリン、チェロ、オルガンの三人によるカンタータの抜粋でも、同じようにリハーサルが進みました。こうした作業を通して、ヴァイオリンとチェロの音がオルガンの音色に埋もれることなく、はっきりと聴き取れることができるようになり、演奏者は互いの音を聴きとり易くなりました。リハーサルが始まったときには、オルガン演奏台とステージの隔たりがそれぞれの音として聴こえていたのですが、これらの作業ののちにはびったりと寄り添うまでになっていました。

三人の音楽家の演奏には驚くばかりでした。豊かなヴァイオリンの音色、クリアなチェロの音色、考え尽くされたオルガンの音色が溶け合ったバッハの音楽を聴き、記念奏楽堂一杯に集まった50余名の皆さんと一緒に深い音に聴き入りました。

最後に、三人の方々が弾かれた楽器を記しておきます。その響きをぜひ想像してみてください。いずれも、約300年前、200年前、そして現代に生まれた名器と言われる楽器です。

ヴァイオリン：1728年製、バルトロメオ・ジュゼッペ・アントーニオ・グアルネリ「デル・ジェス」
チェロ：1822年製、ニコラ・リュポー「Ex Mercadier」
オルガン：1989年建造、ユルゲン・アーレント、パイプ数1206本

(古屋敷憲之)

DONATION / ドネイション / 寄贈

戸田弥生氏より、近日中にリリースされるCD2枚「J. S. バッハ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ & パルティータ」（全曲）が寄贈されました。

* * *

3月30日～4月7日の春季休館中に、バッハの森の北西コーナーにあった小林の樹木を伐採して駐車場を造成しました。まだ平地が広がっているだけで、停車位置を指示するラインなどの整備はこれからすることになっていますが、すでに使用できます。小型車なら、10数台駐車できると思います。なお整地費用は石田友雄氏の寄付によります。

* * *

石田友雄氏より、日本楽器、昭和7年（1932年）製造西川リード・オルガン11ストップ#15703が寄贈されました。これは、故・石田一子氏が幼少時から愛用したリード・オルガンで、1976年につくば市竹園の公務員宿舎に移住したときに東京の生家から持って来ました。彼女はこのリード・オルガンで、つくばにおける最初のオルガン・レッスンを始めました。この度、長年放置されていたリード・オルガンの修理と調整を、アトリエ「木」の日比野四郎氏に依頼したところ、約1年かけて修理を完成したリード・オルガンが3月16日に搬入されました。なお、修理過程を記録した約120枚の写真を収めたアルバムがついています。



日誌 (2022.1.1~3.31)

*R: オンライン参加

- 1.7 休会 雪のため「オルガン音楽研究会」
- 1.8 運営委員会 参加者7名 (R3)。
再生CD鑑賞会 バッハの森記念奏楽堂で、一子先生と奏でたクリスマス 参加者17名。
- 1.13~14 クリスマス飾り等の片付け 5名、4名。
- 1.21、2.4 休会 コロナのため「オルガン音楽研究会」
- 2.1 見学 ナカルリコーダー教室 芦田悠樹氏。
- 2.5 運営委員会 参加者7名 (R3)。
- 2.9 見学 櫻井明美氏、マリア・ジャンヌ氏
- 2.25 延期 「朝のオルガン音楽鑑賞会」
演奏者体調不良のため。
- 3.12 一般財団法人バッハの森理事会 参加者6名。
- 3.16 搬入 修理済みリード・オルガン 日比野四郎氏。
- 3.19 一般財団法人バッハの森評議員会 参加者7名。
- 3.20 創立記念コンサート
参加者29名 (16名+演奏者13名)。
- 3.29 コンサート「オルガンの息と弦楽の響き」
主催: Tsukuba Pipe Organ Project
後援: バッハの森
支援: つくば文化振興財団 参加者54名。
- 3.30 着工 駐車場建設 (4.6 終了)
奏楽堂部分塗装 (4.7 終了) 鈴木造園。
- 3.30~4.7 春期休館

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ コラールを楽しもう/カンタータ入門 (JSB)

- 1.15 コラール「わがイエスキミを放しまつらじと」、オルガン: 安西文子。参加者7名。
- 1.22 第486回、顕現祭後第1主日「私の最愛のイエスは失われた」(BWV 154); オルガン: J. G. ヴァルター「私のイエスを私は放さない」安西文子。参加者8名。
- 1.29 コラール「絶えずみこころのなること願う」、オルガン: 安西文子。参加者6名。
- 2.5 第487回、顕現祭後第3主日「私の神がのぞまれること、それが常に起こりますように」(BWV 111); オルガン: J. パッヘルベル「私の神がのぞまれること、それが常に起こりますように」安西文子。参加者8名。
- 2.12 コラール「御神の思いに委ねまつりて」、オルガン: 別所香苗。参加者6名。
- 2.19 第488回、七旬節「私は神の御心と思いに私の心と思いを委ねた」(BWV 92); オルガン: J. G. カウフマン「私の神がのぞまれること、それが常に起こるよう」別所香苗。参加者7名。
- 2.26 コラール「御言葉の許に」、オルガン: 金谷尚美。参加者6名。
- 3.5 第489回、六旬節「私たちを支えてください、主よ、あなたの御言葉の許に」(BWV 126); オルガン: G.

ベーム「私たちを支えてください、主よ、あなたの御言葉の許に」金谷尚美。参加者9名。

学習コース

- バッハの森クワイア 1.15/12名、1.22/12名、1.29/10名、2.5/12名、2.12/12名、2.19/14名、2.26/9名、3.5/13名、3.12/13名、3.19/13名 (ゲネプロ)。
- オルガン音楽研究会 2.18/10名。
- オルガン・クラブ 1.14/4名、1.28/3名。
- 聖書入門 1.15/9名、1.22/10名 (R4)、1.29/8名 (R3)、2.5/6名、2.12/8名 (R2)、2.19/8名 (R3)、2.26/7名 (R1)、3.5/9名 (R3)、3.12/9名 (R3)。
- 器楽アンサンブル 2.26/8名。
- ハンドベル・クワイア 1.22/4名、2.5/4名、2.19/4名、3.5/4名。
- ハンドベル・リンガーズ 1.16/14名、3.27/11名。
- オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習
1.7/1名、1.8/1名、1.11/1名、1.13/1名、1.14/3名、1.15/2名、1.18/1名、1.19/2名、1.20/2名、1.21/2名、1.22/2名、1.25/1名、1.26/1名、1.28/3名、1.29/2名、1.31/1名、2.1/1名、2.2/2名、2.4、2名、2.5/2名、2.10/1名、2.12/2名、2.13/1名、2.15/1名、2.16/1名、2.17/1名、2.18/2名、2.19/3名、2.23/1名、2.24/1名、2.25/1名、2.26/1名、3.2/1名、3.4/1名、3.5/2名、3.9/1名、3.11/1名、3.12/1名、3.15/1名、3.16/1名、3.18/1名、3.19/2名、3.25/1名、3.26/1名、3.27/1名、3.28/1名、3.29/1名、3.30/1名。

寄付者芳名 (2022.1.1~3.31)

一般寄付

下記の方々から計104,200円のご寄付をいただきました。

地上権積立寄付

下記の方々から計61,000円のご寄付をいただきました。

建物維持積立寄付

下記の方々から計207,000円のご寄付をいただきました。

オルガン修理積立寄付

下記の方から計62,000円のご寄付をいただきました。